

実ビジネスを題材とした Project Based Learning の ファシリテート遠隔支援の試行

Attempt facilitation remote support of
Project based Learning that the theme of the real business.

千葉 佑介*1,5, 藤村 幸弘*2,3,5, 山本 大介*2,4,5, 城戸 宏史*3

Yusuke CHIBA, Yukihiro Fujimura, Daisuke YAMAMOTO, Hiroshi KIDO

熊本大学*1, 株式会社フジヤマカンパニー*2, 北九州市立大学*3, 東洋学園大学*4,
Global Project Based Learning 研究会*5
Kumamoto University*1, FujiYama Company Inc*2, The University of Kitakyushu*3,
Toyo Gakuen University*4, Global Project Based Learning Laboratory*5

＜あらまし＞ 昨今の高等教育機関では、より実践的・実務的な能力強化を目指し、Project Based Learning (PBL) による教育がしばしば行われている。しかしながら、独自に創意工夫してプログラムを組み立てているケースが散見され、教育提供側の大きな負担になっている。その状況の改善策の1つとして、PBL 手法の体系化・標準化を検討しており、幾つかの試行を取り入れたトライアルを実施した。

＜キーワード＞ Project Based Learning (PBL)、体系化、遠隔教育、教育支援、グローバル人材

1. PBL を取り巻く環境

昨今の高等教育機関では、学生のより実践的・実務的な能力強化を目指し PBL による教育がしばしば行われており、その有効性が多数報告されている^[1]。しかしながら、インターネット上で公開されている事例や授業設計ツールの多くは初等中等教育を対象としたもので^[2]、高等教育機関で実際に PBL を行うに当たっての足掛かりとなる情報が不足している。

そのような状況を踏まえ、実ビジネスを題材とした PBL を、担当教員のスキルを問わず実施できるようになる事を目指し、体系化・標準化を行いたいと考えた。本論稿はその為の第一歩として、PBL 未体験の教員に PBL を実施頂き、遠隔支援を行ったものである。

2. トライアル実施概要

トライアルは北九州市立大学の研究室ゼミ授業にて実施した。概要は以下の通りである。

■日程：4 か月間（2013 年 10 月-2014 年 1 月）

■対象者：経済学部 3 年生 12 名

■実施目的：

1、情報シェアリングの重要性を理解する。

2、グローバル・ビジネスとは何か体感する。

■プロジェクトテーマ：

トロントで開催されるイベント「Matsuri」に対する北部九州企業の出展提案

■実施形態：

事前に他の PBL 事例を元に検討・開発したカリキュラムを教員に提示し合意を得た上で、オリエンテーション以外全てをゼミ教員がファシリテーターとして担当する形で PBL を実施。NetCommons をベースに開発した PBL プラットフォーム(図1)を活用して PBL の運営及び、教員への遠隔支援を行う。受講者からは毎週週報という形で報告を上げて貰い、各人・各 Gr の状況を相互に確認した。



図1：PBL プラットフォーム (FujiyamaPlace)

■カリキュラム（要点抜粋）：

- ・オリエンテーション
グローバル・ビジネスとは、プロジェクトワークとは、事例紹介、事前テスト受験／約 5 時間
- ・個人の目標設定
ライフプラン作成／2 時間
- ・チームの目標設定
チーム目標と役割分担の決定／約 1.5 時間
- ・会社の仕組みの理解
企業・行政・団体の結びつき、世界の主要機関調査／約 1.5 時間
- ・提案作成
約 1.5 ヶ月間の間に 4 回（各約 1.5 時間）のゼミを設定し、各ゼミ間に提案作成
- ・成果発表
提案書の最終プレゼン／1.5 時間
- ・振り返り
学び・気づきシェア、事後テスト受験／1 時間

カリキュラムの合間にはテスト結果、週報のサマリ、アクティビティ状況（図 2）などを成績書の形でゼミ教員に報告し、毎週受講者から提出して貰う週報と合わせてフォロー施策の検討を行った。

		11月	12月	1月	Total
A君	ログイン回数	12	16	22	50
	アクセス回数	26	23	21	70
	投稿(トップ)	2	2	5	9
	投稿(チーム)	1	0	0	1
B君	ログイン回数	12	14	3	29
	アクセス回数	20	11	3	34
	投稿(トップ)	4	0	0	4
	投稿(チーム)	1	0	0	1

図 2：アクティビティ状況報告資料（抜粋）

3. トライアル実施結果

PBL 終了後、ゼミ教員と受講者にインタビューを行った。それぞれの抜粋を以下に記す。

■ゼミ教員：

- ・FujiyamaPlace を使う事により、バーチャルコミュニティが形成され、リアル・バーチャル共にコミュニケーションが活発化した。
- ・プレゼン資料の質、作成スピードが向上した。
- ・情報シェアを効率的に行なった結果、ビジネス

の企画書を短期間で作り上げる事ができ、受講者の自信に繋がった。

■受講者：

- ・序盤でグループ内での情報の共有に失敗した事で、情報シェアの大切さが身にしまった。
- ・FujiyamaPlace を使う事で、情報を整理しやすくなり、他の仲間の進捗度がリアルタイムに判る事で自分が今何をするべきかわかり易かった。
- ・グローバル・ビジネスについての調査などを通して、PBL を始めた直後と比べ、幅広い視点で世間を見渡すことが出来るようになったと感じた。

結果的にはファシリテーター・受講者それぞれから概ね良い評価を得たが、ゼミ教員のスキル・経験に援けられた部分も大きく、カリキュラム外でマーケティングなどについて補講を実施頂いていた。また、週報にゼミ教員以外の視点からの示唆が欲しかった、ゼミ教員と遠隔支援者の関係性次第では遠隔でのやり取りに不安が出そうであるなどとのコメントも頂いており、改善を検討したい。

4. まとめと今後の展開

以上の結果を元に PBL の体系化・標準化を進め、PBL を更に円滑かつ効果的に進める為の遠隔支援についても検討したい。

今後の課題としては、講義部分の受講者理解度を教員のスキルに依存させない為の標準学習コンテンツの開発や、遠隔支援者からの働きかけの強化、ゼミ教員と遠隔支援者の間でのやり取り方法の簡易化などが挙げられ、大学での PBL 実施支援を通して改善を進めてゆく。

参考文献

- [1] 大学における新しい学習観に基づいたプロジェクト学習のデザイン. 工学教育. 57-1, 美馬のゆり (2009)
- [2] 高等教育機関における Project Based Learning 設計支援ツールの開発, 上田勇仁 (2012)